

フレイザーとマリノウスキー

—B. Malinowski: Sir James George Frazer: A Biographical
Appreciation (1942) (in A Scientific Theory of Culture
and other Essays, with a Preface by Huntington Cairns,
1944) — ニコラス

堀 喜 望

—

フレイザー (1854-1941) とマリノウスキー (1881-1942) は、謂はば人類學の對立する二つの極を代表してゐるといふことができる。前者がその過去の全體を象徴してゐるとすれば、後者は現在の頂點であり、ある意味においては人類學の將來を志向してゐる。フレイザーが比較的方法と進化論的觀點を軸としてゐるのに對して、マリノウスキーはかかる立場の最も徹底的な批判者の一人であり、文化的綜合研究と機能主義的文化理論の唱道者として知られてゐる。更に付け加へれば、フレイザーは廣い古典的言語の知識を驅使し、地球上の凡ゆる文字なき民族の調査報告を自らの手で處理して、人類の古代文化と現存の未開種族との間に巨大な「歴史」の橋を架け渡し、等身に及ぶ著書の中に「人類」文化の歴史に關する金字塔を建設した。その綜合的な成果は單に人類學の専門研究者のみならず、古典・文學・歴史など凡そ文化の問題に關心をもつ學者・知識人に親しまれて來た。殊に一九二二年（大正十一年）に著者

自身によつて編纂された「金枝篇」の縮冊版は一般讀書人の教養の書として普及され、わが國においてもこの時代に學生時代を過した私たちの先輩にあたる人々の記憶を、今尙ほ強く領してゐるのを聞くことができるであらう。しかし人類學の専門領域においては、フレイザーは既に久しく「歴史」の人物となつてゐる。彼のたゆみなく積み重ねられた研究はその後にも續いて、「金枝篇補遺」(一九三六)、「トーチミカ」(一九三七)、「アントロギア・アントロポロギカ」(一九三七—三九)などの形で次々に發表されてはゐるが、最早や人類學の現在の動向に新に附け加へるものとはなかつた。

これに對してマリノウスキの名は、今日の人類學と謂はば同義語に近いといつても過言ではない。土語の深い言語學的理解に基き、社會分析の鋭い理論的洞察をもつて、太平洋上の孤島トロブリアンド諸島をその人類學的實地調査の固有の地盤として出發したマリノウスキの研究は、人類學における科學的調査研究の模範として推崇されてゐる。それは人類學に未開種族の集中的研究の獨自の方法を指示したと共に、その文化・社會理論に機能主義的見解を展開し、人類學の方法と課題に關して從來の傾向を更新したといふ重大な意義を擔つてゐる。その業績は今日人類學の研究にたゞさはる者の見逃すことのできぬものとなつてゐる。しかし専門領域を除いては、マリノウスキの名はフレイザーほどの一般性をもつてゐないといふことも、兩者の學問的左位置の對照を示してゐるものである。

このやうな對立にもかかはらず、フレイザーとマリノウスキの間には兩者を結びつける一本の赤い糸で織り成されたつながりがある。事實、マリノウスキの著書はその卷頭をフレイザーの序文で飾られてをり、神話に關する美しい一篇はフレイザーに捧げられ、恰かも未開人の呪文の折返しの句のやうにその名が呼ばれてゐる。現代の人類學に新しい光をもたらしたといはれるマリノウスキの研究は、實はフレイザーの業績の上に築かれたものであつたのである。それはフレイザーを出發點とし、謂はばその發展として成長し實を結んだものである。ヨーロッパの周邊ボートランドのクラカウ大學の數學・物理學の一人の學生が、「金枝篇」の魔力に導かれて「人類學」のイニシエーション

ンに參列し、遂に南太平洋の航海の中に新しい學問の鍵を發見すべき運命について、マリノウスキ自身その感懐の記憶を記してゐる。——「この偉大なる書物を読み始めるや、私はそれに没禮されその奴僕に房へられる身となつた。デエィムズ・フレイザー卿によつて贈られた人類學が偉大なる科學であり、これよりも古く且つ一層精密な姉妹學問の何れにも劣らずこれに身を獻げる價值のあるものだといふことを私は悟つた、そしてフレイザーの人類學に奉仕すべく義務づけられるやうになつた。」

このやうな運命がフレイザーに結びつけ、その個人的な接觸は三十一年に及ぶとマリノウスキ自身語つてゐる(Pr. 181)。してみればそれは丁度フレイザーの大嘗トトーテミズムと外婚制(一九一〇)の出版された時代に廻り、一九一四年のマリノウスキのメタネシアへの旅がその指導と示唆に負ふてゐることが理解せられる。それはフレイザーの「精神」が實地調査の成果の中に開花したものと云ふことができるであらう。兩者の結びつきは、かくして二人の學者の個人的關係といふより以上に、人類學にとつてより本質的であり且つ内面的なものとなつたのである。即ちそれは先づ第一に、二十世紀における人類學そのものの歴史であり、その發展を表はしてゐる。その「赤い糸」を辿ることは二十世紀の人類學が經て來た華かな色彩の變化に一つの階調を與へるものである。それと同時にこの二つの發展の極は同一の精神で結びついてゐる。それは人類學におけるヒューマニズムであり、人類學を「人類の科學」として成立せしめる根本的な展望である。フレイザーはそれを人間の歴史の中に探ることによつて、人間の野蠻と蒙昧の中から築き上げられる文化の濫か「辯護人」として振舞つた。これに對してマリノウスキは、現存する未開人の親しい友として出發しつつ、文化と社會の中に人間的な営みの要求を理解しようとし、單に個々の未開社會の事實にとどまらず、一般に人類文化の社會的適應に關する廣い視野を人類學の本質的課題として明かにしてゐる。そしてこれは實は今日の人類學そのものの一つの根本的な問題に觸れるものに他ならないであらう。

このやうな内面的な關係を探ることはそれ自身一つの大きな課題である。しかしそれについてマリノウスキ自身

が自ら語つてゐる文章は、われわれにとつて注目し値するものであらう。表題に引用した一篇がそれであり、フレイザーの追悼のために書かれたと思はれ、そして恐らくマリノウスキーの最後の論文となつたものであらう。フレイザーの死を世界の學界が如何なる形で記念したかは知る由もないが、この一篇はフレイザーに對する最も正しい評價をもつて書かれた、最も温かい追悼の一つであつたらうことは疑ふ餘地はないであらう。

この度の戦争の期間にわれわれはこの二人の人類學の教師を喪つた。フレイザーとその夫人の死については當時日本の新聞にも報導されたところである。一九四一年といへば丁度ドイツの英本土空襲の最中であり、新聞はその模様を書き立ててゐたことを私は忘れることができない。フレイザーの死もその犠牲であるといふやうなことも耳にし、單なる噂以上のつきつめた心で氣になりつつ、今尙正確かめることはできない。しかしそれは兎もあれ、あのやうな「宇宙的人間」の最後の一人が、「野蠻」とフアシズムに壓殺されたといふことは否定できない事實である。殊にその頃の日本はさういふ「世界的」な精神について語る餘地は最早やなくなつてゐた。外國の雜誌・文獻も殆んど輸入が途絶え、フレイザーが如何に記憶され且つ葬られたかについては遂に知ることができなかつた。この出來事を通して日本の學問と文化の孤立を導いたものに對する深い憤激を感じたことは、今鮮かな記憶をもつて思ひ返へされる。

このやうな暗黒と獨善の中で、戦時中のマリノウスキーの死を知る機會を得なかつたのはまた當然であつた。私が最初にそれを聞いたのは、戦争が終つてアメリカの學者ペシン氏 (Hubert Pessin) のアメリカ人類學の近況についての講演の節であつた。學問の國際性に感激を新たにし、日本の學問が世界の人民の平和のために、人民の力によつて再建されるのでないならば、學問自身の眞の發展も見られぬことを、深く思ひ知つたことを附け加へるのは無意味ではあるまい。兎もあれ私にとつては、この二人の人類學者の名前はこの度の戦争とその運命とから切り離して思ひ浮べることのできないものとなつたのである。

最近マリノウスキの遺著に接することができ、表題の論文を發見したので、その紹介を思ひ立ち、この二人の學者の關係を簡單に考察することによつて、後學の捧げる記念にしたい。

註 I Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Me-

lanesian New Guinea, with a Preface by James George Frazer, 1922.

II Myth in Primitive Psychology, 1927.

III *ibid.* p. 6.

II

フレイザーは——マリノウスキの言葉をもつてすれば——英國の古典的人類學の最後の「殘存者」(D. 179)である。また彼の死をもつて終焉する人類における「一時代」の代表者(D. 187)であるともいつてゐる。それは一般的に承認される評價であり、フレイザーの位置づけを意味する。事實フレイザーは人類學の十九世紀と二十世紀との結節であり、その集大成ともいふべきである。彼以前の人類學がその中へ流れ込み、彼以後の人類學はまた彼を源とし、豊かな景觀の變化を聞いたからである。即ちフレイザーはタイラーに初まり、マクレナン、モーガンの進化論的英國人類學派の流れに屬し、またロバートソン・スミス、マンハルトの系統を受け「人間の科學」としての人類學の内容を豊富にし、二十世紀前後のあの學問的繁榮の「實質的」な基礎を興へた。それと同時にデュルケーム、レヴィ・ブルニール、フロイト、ハリソン、ハートランド、マレットなどの夫々独自の天才的な理論と方法とへの道を開き、このやうな發展の源泉となつてゐる。マリノウスキもかかる流れの一つの——しかし重要な交叉の中にあることが見逃されてはならない。それのみならず、フレイザー自身は最後まで書齋の人であつたにもかかはらず、人類學における實地調査の最もよき理解者であり、その有力な支持者、指導者であつた。フアイゾンとホーヴィット、スペインサ

いとギレンのオーストラリア調査に示唆を與へ、これを學界に紹介してその成功を激勵したのはフレイザーの助力によるのであり、リヴァーズ、ハッドン、セリグマンなどによるケムブリッジ・トレス海峡探險隊、アフリカのマツキイ民族學探險隊におけるロスコウなど、科學的な實地調査に對するフレイザーの示唆は著名である。このやうにしてフレイザーが人類學を巨大な「實證科學」として育て上げたことについては何人も異論のないところである。

してみればフレイザーを語ることは、人類學の「歴史」そのものについて語ることであり、その多彩な相貌を一つの色彩で繪がくことは殆んど不可能に近い。しかしその巨大な構想の底を流れる基調を「ヒューマニズム」——この語の歴史的な意味での——として捉へたマリノウスキの理解は (P. 183, 201) 本質的な正當な評價でなければならぬ。そして、その構成の多様性を一つの「矛盾」の相において展開してゐることは、マリノウスキの鋭い洞察を示してゐると共に、やがてはその解決が彼自身の課題として、マリノウスキの立場へ導くつながらとなつてゐる。

フレイザーをヒューマニストとし、ペーコン、モーブ、或ひはスウィフトと比較することは一見大膽な比論の如く見えるかもしれないが、その本質に觸れてゐる。それは單にフレイザーの古典的博識や人類學的専門などの一面性においては理解し得ぬ深みであると共に、これを全體的にフレイザーにおいて體現せしめてゐるところのものである。このやうなマリノウスキの理解は、全體的脈絡における考察といふ彼自身の學問的態度をあらはしてをり、この四十頁内外の一篇を單に一人の高名な専門人類學者の評論といふ關心を起えて、フレイザー文獻として信頼せしめるものたらしめてゐる。事實フレイザー自身が自らの人類學の仕事を、かのルネサンスの古典研究の態度と比較してゐる。中世の迷妄を破つて、明るい前途に充ちた前途が保證される人間の自己認識が、色あせた古文獻の塵に埋つて精力を傾けた學者たちの心に芽生へて來る時代を回想してゐる。フレイザーの前には地球の各地から集められる新しい未だ解讀されない言葉がある。それはかかる資料の山の中で苦闘する學問の認識である。そしてまたやがて聞かれる人

類の展望に備へる案内人の役割といふ點においても相通じるものがある。かくの如くフレイザーは、人類學を人間の廣い知識として、その進歩と自由とのための科學として描き出し、龐大な事實の堆積を専門的術學主義の無内容から救つてゐる。所謂進化論的假説として批判される「遊歩」の思想も、實はこのやうな人類の歴史に對するフレイザーの深い共感の根柢から理解さるべきではなからうか。

フレイザーにおけるかかる過去と未來、事實の詳細な蒐積と理論に關する無批判と單純性、分析的な理論と綜合的な人間の洞察とに見られる全體的性格を、マリノウスキは先づ「フレイザーの人と作品の矛盾」(第一節)の姿で對照しつつ、その「民族學の發展における位置」(第二節)を明かにする。マリノウスキはかかる「矛盾」を、その「廣い展望と關心」と「狭い理論的見解と一般的偏見」として一般に指摘し、これを三十年に亙るフレイザーとの個人的接觸の經驗を結晶させてその人物を描き出してゐる。フレイザーの「廣い展望」については誰しも承認するところで既に上述によつても明かであらう。しかしこの人類學の偉大なる教師は、殆んど人との廣い實際に適應することができない人であつた。手續などにより學者に示唆を與へ彼等の發展に貢獻した彼は、公開の學問的講演講義は極めて不得意で且つ無關心であつたといはれる(P. 182)。このやうな性格は、またフレイザーの學問的態度にも結びついてゐる。あのやうに廣く資料を涉獵し理論を検討しながら、フレイザーは諸家の理論的成果を自己の發展に攝取することが尠く、他人からの批判に對して頑なでさへあつた。彼は自己の見解を謂はば獨斷的に進めて行き、「辯證的に」これを發展することができなかつた。フレイザーは久しく他人の批判を讀まず、學問上の論争をしなかつた消息についてマリノウスキは述べてゐるが(P. 202, 203)、理論における狹隘と「偏見」が指摘される所以が見られる。これを示す例としてマリノウスキは、フレイザーの精神分析學に對する無理解と、デュルケムなどのフランス社會學派の業蹟の過少評價を擧げてゐる。そしてこの二つはまたマリノウスキの理論においてその根柢が強く認められ

るところのものである。フレイザーのかかる態度に對して、マリノウスキーは様々な理論的見解に敏感であり、その立場はこれらのものを採用しつつ形成されたものである。上述のデュルケームの社會學的方法、エリス、フロイトの精神分析學の影響は勿論、ロイド・モーガンの生物學的見解、行動主義心理學、更にプラグマティズムの哲學が彼の社會學的見地の根柢を強く支持してゐることは周知のところである。マリノウスキーがフレイザーの影響を深く受けながら、その立場を脱して今日の人類學に大きな關心を呼んでゐるのは、このやうな理論の批判性と斬新さによるものであり、また独自の學風をもつたアメリカの人類學界において重きをなす所以も、勿論その研究業績によることながら、かかる社會・心理學上の精神的近親性に由來することは見逃すことができないであらう。

このやうな理論的偏弊として指摘されるものは、しかしまたフレイザーの執拗な實證的態度と相關的であることを注意しなければならぬ。フレイザーはどこまでも實證的資料の比較検討をその學問の生命とした學者である。證據の導いて行くところに従ふ、といふのはフレイザーの著書の至る所に繰り返されてゐる言葉である。また確實な資料の連環が事實をもつて繋ぎ合はされるまでは特定の斷定を避けるともいつてをり、證據が變ることにその理論も變更さるべきことをその學問的態度としてゐる。このやうにして彼の理論的假説は常に將來の新しい事實の前に開かれてゐる言葉通りの「假説」として提出されたものである。事實フレイザーはかかる學問的態度に終始忠實であつた。彼の有名なトミズムの理論が三個の理論的假説をもつて置き換へられたことは周知知られてをり、フレイザーの學問的良心を物語る實例ともいふことができる。しかしながらこのやうな事實への偏愛或ひはその過信は、彼の理論的無批判性或ひは無關心、従つてまたその偏狹性へ導いたこともまた否定することができない。フレイザーは彼の事實に對する如き理論そのものの嚴密性の批判的検討に意を盡さなかつたやうである。彼のある箇所の言葉によれば、彼は自分の意見の形成のために直接事例に従がつて、それに関する他の學者の意見を蒐集することをしなかつたと告白してゐる。事實の學者にとつて徒らな理論的論争が餘りなきものであり、煩らばしい重荷に過ぎぬことは深く同感さ

れると共に、それがまた自己の理論を「辯證的に」發展せしめることなく、却つて理論の偏狭性に固定化したとするマリノウスキの指摘を證明するものである。

フレイザーの實證的立場の固執は、他方においてまた彼の貴重なる事實蒐集の努力に關して、それを處理する理論的方法の反省を徹底しなかつた。マリノウスキのいふ如く、フレイザーはその資料處理において、民族の文化と關心が種々の方面において相互に關聯してゐることに注目してをり、それが全體的脈絡の中で生きた關聯において把握しなければならぬといふ見解を含んでゐる。しかしこのやうな態度を實地調査の實證的方法として自覺的に發展させ、更に文化の理論的見解として批判的に徹底させたのは、實はマリノウスキの業績であり、フレイザー自身は自己の中から成熟して來るかかる批判的洞察とは無縁であつた。フレイザーは比較方法の立場に終始し、凡ゆる人類學的資料の蒐集整理に没頭したの概がある。晩年その視力を失つた不自由の中で、彼が自ら集めた草稿を整理し、五つの大陸の全領域に亘つて打ち建てた巨人の記念碑にふさはしい「アントロギア・アントロポロギカ」の四巻は、その古い立場を象徴してゐるものといふことができる。

これに對してマリノウスキは、フレイザーのかかる文化の脈絡的全體的考察をトロンリアンド人の實地調査に適用し、實證的人類學に新しい道を開く機縁となつた。即ちそれは原住民の文化的諸現象をその全體的文化の脈絡の中で相互に關係する集約的部分として把へ、文化的全體における機能的役割を明かにする。それと同時に文化的形態を人間生活の基礎的要求に結合し、その行動的反應において文化的觀念・動機の意味を理解するといふ方法である。このやうに反省され精密化された方法において獲得した成果によつて、マリノウスキは單に未開社會の調査方法の原理としてにとどまらず、一般に社會的な文化理解の理論としてこれを展開し、所謂機能主義的文化理論を形成した。それは文化を「道具的な實在」として考察する實在的な見解であると共に、それが「人間の欲求充足のために實在する」に到るものとして、人間生活の活動との關係において理解するところの機能主義的な立場を表はしてゐる。マリ

ノウスキーによれば、フレイザーの實證的事實は、實はかくの如き理論的洞察にまで發展され自覺されるべき内容をその中に含んでゐたといふのである。

してみればフレイザーの「矛盾」は、マリノウスキーによつて批判され克服されるべき古き人類學の形態と、彼が繼承發展せしめた新しき人類學の萌芽との對立であり、マリノウスキーがその解決を負はされた課題としてあらはにされたものに他ならない。そして、それはフレイザーの理論と事實との相互的矛盾の中に最も鋭く展開されるころのものであつた。

註I Golden Bough, A Study in Magic and Religion, Preface to the Second Edition, p. XXV.

II i. e. cf. Totemism and Exogamy, A Treatise on Certain Early Forms of Superstition and Society, in 4 Vols., 1910, Preface p. XIII.

III Ibid., vol. 4., p. 52-59.

III

フレイザーの事實の巡禮はジグザグを極め、探鑿の道は深く且つ廣いが、しかしその問題と理論は單純で明確である。それは「歴史の領域の彼方に横はつてゐる暗黒時代」における「人間の思想と制度の成長」の跡を辿ることであり、人類の制度の歴史の再構成をその根本的課題としてゐる。そしてこれを支へる二つの理論的支柱が進化の理論と比較の方法である。このやうな立場の前提となるものは、人間精神の普遍的類同性であり、進化の漸進的段階性であり、事實の歸納的一般化の方法であり、所謂殘存的「遺制」の解釋であるといふのは(2) (3)、今日最早や教科書的に一般化されてゐる批判である。このやうな立場から、例へば神話は原始的哲學だとするタイラーの主知主義的解釋を繼承し、その社會的因子を無視することが指摘される。また婚姻の理論はモーガンの原始亂婚制・集團婚の假説

を採用し、タブーについては司祭、酋長の野心と貧欲の個人的心理の中にその起源が見出される。その心理學的解釋も専ら個人的心理の領域で考察され、社會的心理の根柢の理解を缺いてゐる。例へば有名な呪術の理論は、かくて類似及び接觸の觀念聯合の原理で解釋され、トーチミズムの起源は懷妊に關する聯想の俗信に由来せしめられる。このやうにして、フレイザーによれば人間の制度の歴史は、その不合理なる「俗信」を起源とし、「朽ちた土臺」の上に築かれた迷妄に起因するといふ合理的・主知主義的解釋に導かれる。

しかしながらかかる諸制度は、フレイザーによれば誤つた前提から「健全な結論」を引き出してをり、人間生活の要求に應へるものとして、その基礎が「事物の本性」の中に求められるといつてゐる。かくして例へば支配者の超自然的な絶對的權力は、また彼の實際的な處置における専門の能力と結合されてゐる關係において理解され、支配者に對する尊敬が共同態の秩序の建設の實際的機能において見出されてゐる。また性の關係が積物栽培に影響するといふ相關性について、祭祀を食料生産の實用的活動との關聯において、タブーを所有權保護の機能を營む原始的刑法と結びつけて理解するといふフレイザーの「機能的」考察が指摘されてゐる。かくして「サイキス・タスク」(一九〇九)の中から引用されたフレイザーの理論的矛盾を展開しつつ(P. 103)、彼の「特殊的理論を二三批制的に分析」(第三節)として、マリノウスキは自己自身の理論的見解を明かにして行くのである。

マリノウスキの立場が、文化をその諸部分の全體における相互關聯において理解し、その全體の脈絡を明かにすることにありといふのは既に述べたところである。そしてこのやうな態度をフレイザーの實證的研究の中に見出してをり、「サイキス・タスク」の「矛盾」もそれを明かにするものであつた。しかしマリノウスキがかかるものとして最大の言葉を費し、「人類學の若き研究者にとつて最良の入門の書」(P. 103)といつてゐるものに「トーチミズムと外婚制」(一九一〇)における未開民族の民族誌的敘述があることは注意してよいであらう。この老大な四卷の書物は專

門家の厳しい批判に曝されたもので、例へばA・ラングやゴールデンワイザーなどは直ちにその理論を批判してをり、その徒らに廣大な雜然とした事實の無批判的羅列と凡庸な思想的構成とまで批難するものもあつた。しかし今やマリノウスキヤによつてその名譽が恢復された。たとへその理論の誤謬が訂正され、他の理論により置き換へられるときがきても、「事實の廣汎な蒐集と正確な分類」とによつて、それは依然として興味をもち續けるであらうといふレイザーの謙讓な豫言が再び承認されたわけである。レイザーはそこでト・テミズムを「各部族の社會的・政治的組織の脈絡の中」に置いて把握する、即ち社會組織、婚姻關係(外婚制)、生産技術、呪術的思想、儀式的禮拜、などの諸制度との關聯において全體的に考察するといふマリノウスキヤの所謂機能的作用が考慮されてゐる。従つてその理論的見解は既に顧みられないとしても、レイザー自身が開拓した人類學の地盤は正しい評價にもち來らされたものと云へる。

かくしてレイザーの「批判的分析」は最早やその個々の理論の内容に立ち入つた紹介論評を必要としないであらう。それは事實これらの「問題」を廻つたマリノウスキヤ自身の見解の展開に費されてゐるといふことができる。そこで例へば呪術論について、マリノウスキヤの「呪術、科學及び宗教」(一九二五)の關係が述べられてゐる。また婚姻及び家族の起源に關してそれが性的要求を基礎とする社會制度としての法的道德的經濟的關係を明かにしてゐるなどである。それらの理論はマリノウスキヤの「文化」、「信仰と道德の基礎」(一九三六)などの論文で述べられた思想と全く同一の趣旨である。われわれはそこに特別に新しい見解の發展を見ることはないが、レイザーに對してマリノウスキヤの機能主義の理論の一斑を明かにするため、その思想を簡單に要約しておかう。

レイザーの呪術論は、その共感的・模倣呪術と接觸呪術とに分類した獨自の名稱によつて周知知られてゐる。それは觀念聯合の類似・接觸の原理に基いて成立する原始人の俗信的觀念であり、この法則によつて自然力を任意に統制しようとする原始的技術を含むものとされる。従つてそれは謂はば原始的な科學的認識である。これに對してかか

る自然の恣意的支配に對する原始的迷妄が破れて、その超越的威力を自覺するやうになると、それに對する人間の宗教的崇拜と禮拜の體系が成立する。人間は自己の力を越えた「超自然的」なものに敬虔となり、その秩序に服従するといふ精神の段階に到達する。呪術が宗教に先行するといふフレイザーの基本的假説はこのやうにして説明されるのである。

しかしマリノウスキが實際の未開人の生活を觀察して得た結論によれば、彼等は平常的な自然の法則に關する所謂合理的な認識を有してをり、これに對する技術的な處理を心得てゐる。所謂「原始的心性」とか聯想の誤れる適用といふ如き現象が未開人の現實の精神生活に妥當しないことを、マリノウスキは繰り返し強調してゐる。彼等はかかる物質的な合理的認識に基いてその生活を安全確實に導いて行く。彼等はそれによつて農作を營み、漁業や航海の技術を運營する。家を造り、道路を開き、或ひは天候を判斷する等の生活的な營みが、何れもかかる認識の導きを第一としてゐることはわれわれの場合と同様である。それは彼等の社會生活の基礎をなすものであり、従つてその専門的知識の卓越は社會生活の指導に役立つ、社會的地位を保證するはたらきをもつてゐる。かくの如く未開人の物質的知識は合理性をもつてをり、技術的處置をもつて社會的に運營され、彼等の社會生活において特定の機能を營んでゐる。それは、文化の道具的實在に對する條件であり、文化的諸活動を組織統一する基礎としてはたらいてゐるのである。しかしながら彼等の生活過程においては、かかる人間の知識と能力とを越えた偶然と不慮とに遭遇することを避けることはできない。大念に耕された作物に雨が欲しいとき——そしてそれは當然も来ねばならぬ筈であるのに、日照りが續くことがある。暴風は漁夫の一切の計畫と努力を臺なしにしてしまふ。病氣は知らぬまに襲ひかかつて來る不安であり、戀愛とその成功はわれわれにとつても「思案の外」であり、廢物である。このやうな合理的知識を越え、實際的努力の及ばぬ領域——「超自然的」とも名づくべき領域に對して、未開人は呪術をもつて對處するのである。彼等はそれによつて欲求と不安の激發を安定させ、逆に社會的日常生活を保證し組織する役としてゐる。呪術に

おいて行はれる模倣的な身振り、呪物の處置などの儀禮と傳承された呪文との呪術的行爲は、欲求された目的及び結果を演出するものとして、主觀的満足の心理的役割を果し、緊張した感情の流出によつて社會的生活を安定する機能を有してゐる。またかかる呪術的儀禮は傳統的な方式をもつて執行され、それに關はる共同體の最も重要な事件に關し、共同體の組織を強化する。またそれを執行する指導者の地位を保證し、集團の社會的身分を定めるなど、その社會的生活を統一する實際的はたらきの側面が認められる。かくして例へば農耕呪術において、呪術者は集團の勞働の指導者の役割を果し、タブーに従ふことは耕作を組織し、成員に彼等の實際的な努力の成功に對する確信を保證し、戰爭の呪術も同様に成員を組織し、勇氣づけて、自己の勝利を確信してその指導統率に服従せしめるはたらきを有するのである。

以上の如く合理的認識と呪術は、未開社會においても夫々獨自の主題を有し、社會生活の特定の要求に關はるものとして區別された領域をもつてゐる。兩者は技術または儀禮の形態によつて夫々の實際的な機能を營み、かかるものとして社會の文化的生活の全體の中に夫々の位置を占めるものである。

かくの如き關係はまた呪術と宗教との間にも認められる。宗教は人間存在の根本問題、例へば死と不死について、自然方の崇拜、或ひは攝理の支配に對する和解などの問題に關係する。それは人間生活の眞の悲劇、人間の企圖と現實との葛圖に由來し、超自然的な原理に頼るものである。しかしかかる超自然的な領域も尙ほ人間の現實的生活を導き安定させるはたらきをもつてゐる。マリノウスキーによれば、間接的で高級ではあるが矢張り人間の基本的な生の要求と結合されてゐる。従つてそれは呪術と同様に豫見と想像とを源泉とし、人間の現實的生活において機能する超自然的なるものに對する態度である。しかし呪術が常に特殊の具體的な、部分的問題に關はるのに對して、宗教は上述の如き一般的根本的なものを主題とする明確な區別を有する。かかる主題の相違に従つて、その精神的態度、社會的行爲、日常的機能のはたらきにおいても兩者の區別は未開人の間でも自覺されてゐる。マリノウスキーは宗教現象

をかくの如き人間生活の全體との關聯において理解し、それが單に超越的な存在の觀念、神話・教義の體系にとどまらず、同時にその祭祀・道徳との相互關係として成立する所以を明かにしてゐる。即ち超自然的實在の確證は教義の體系において、或ひは神話的傳承の形態において展開されるが、同時にまた祭祀の行爲によつてそれが實現され、超自然的なものとの一體性の關係に入り込むことによつて現實が改變されるのでなければならぬ。このやうな現實との關聯によつてそれはまた第三に社會の道徳的體系に關係する。即ち宗教的崇拜は集團の共通の關心に觸れる共同的な事柄であり、かくして集團の社會的規範を成立せしめる。かかる道徳的な社會的規範によつて集團の組織は強化され、秩序を維持すると共に、その社會生活の安寧が保證される。このやうにしてそれは人間の生活的要求に基礎づけられ、その全體的構造に關聯せしめられることにより、また社會的諸制度との相互的關聯にあるものである。

かくの如くマリノウスキーによれば、科學・呪術・宗教は人間生活において夫々獨自の要求によつて區別され、その行爲的な形式によつて社會の文化的全體の機能的な部分を形成してゐる。従つてそれは人間の文化的要求を源泉とし、呪術から宗教へといふ如き「進化」の過程においてその起源が求められるのではなく、謂はば文化の最初から存在してゐるといはなければならぬ。勿論これらの事柄はフレイザー自身も認めてゐるところであり、自然の觀察から得られた眞理の法則は常に何等かの程度で人間に知られてゐるといつてゐる(B. 80)。またこれらの形態が人間行動の異なる面に關はり、共存し得ることも認めてゐる。更にフレイザーは呪術が社會に對する組織力として役立つ、その實際的活動を統制し、社會における權力と身分を保證する機能を明かにしてをり、それはフレイザーの功績としてマリノウスキーが指摘するところである。^(五)しかしフレイザーがこのやうな關聯を自覺的に發展することなく、舊い進化の原理に基いてその呪術論を體系的に組織してゐるのは、フレイザーの理論的狹隘性を示してゐると共に、その「矛盾」のあらはれともいふべきであらう。

このやうにして文化の「起源」の意味もマリノウスキーにおいて新たな照明的下にもたらされなければならぬ。

それは、文化的に確定された反應の生起を決定する條件、即ちかかる科學的な決定性の限界の中で、行爲、考案、風習、制度の本質を限定するところの條件〔p. 200〕を意味する。従つてそれは個々の文化的形態を孤立的にその先行状態に遡つて探索し、或ひは人間精神の一般的假説に歸屬せしめることではない。それは人間の諸要求の本性に關係せしめて、人間生活の諸關聯の中に形成される文化の本質的條件を明かにすることである。即ち「文化的現象を一方においては人間の生物學的な實質に關係せしめると共に、他方人間の環境に對する關聯に關係せしめて分析」〔p. 203〕することであり、それを複雑な道具的現實の關聯と發展において進ることを意味する。かくしてそれは文化的現實の條件を人間の文化的要求の一般的本性と關係せしめて理解する「文化の科學」、その「一般的法則」の研究を含むものである。してみればそれは、やがてはマリノウスキの機能主義の立場そのものに導くものであり、人類學の一般的課題を指示してゐるであらう。そしてこのやうな新しい展望は、マリノウスキによれば、またフレイザーのヒエロガムニズムの精神に負ふべきものである。

註 I Golden Bough, Preface to the Second Edition, p. XXIV.

II Psyche's Task, A Discourse concerning the Influence of Superstition on the Growth of Institution, (1909) 2. ed. 1920, p. 5.

III Totemism and Exogamy, 1910, Preface, p. XVI.

IV Culture, in *Encyclopedia of the Social Sciences*, ed by E.R.A. Seligman, Vol. 4, 1931. The Foundations of Faith and Morals, An Anthropological Analysis of Primitive Beliefs and Conduct with Special Reference to the Fundamental Problems of Religion and Ethics, 1936. The Group and the Individual in Functional Analysis, in *American Journal of Sociology*, Vol. 41, 1939.

V B. Malinowski, Culture, p. 629.

四

以上われわれはフレイザーの「批判的分析」を手がかりとして、マリノウスキの機能主義的な文化的見解を考察した。それはフレイザーとの關聯において、その發展として機能主義の問題を明かにするものとして注目すべき理解を含んでゐる。しかしをこに述べられた内容そのものについては、上述の如くマリノウスキの從來の理論の繰り返しともいふべきである。それを對して人類學の將來の展望及びその一般的課題に觸れる最後の部分、本論の第四節をたす「人類學は何處へ」といふ一節は、マリノウスキの比較的最近の思想を示唆してをり、問題とすべき多くの論點を含んでゐる。

「民族學の發展におけるフレイザーの位置」とその「理論的批判的分析」を通して、フレイザーにおける「過去の時代」の中に「現代の科學的人類學の先驅者」(Pioneer)が見出された。それは、未開蒙昧の中に人間の發展の萌芽を讀み取る傳統と人間性への愛であり、人間本性の本質的な同一性の洞察である。即ち人間の進歩と理性と平等への深い要求であり、一言でいへばフレイザーにおけるヒューマニズムの精神である。従つてまた、人間の第一次的な要求に關係させて文化の物質的施設と集團的共同を理解する脈絡的な「機能的」考察が、それを基礎として成立する。かかるフレイザーの基礎構築は現在の科學的立場においても捨てられるものではなく、彼の比較方法もまたかかる立場の下では認識の手段としての役割を見出すことができるであらう。

このやうな發展の關聯を通れば、當然またその中に將來の展望と人類學の一般的課題への道が開かれて來ねばならない。マリノウスキにとつて、それは第一に人類學の諸の立場を綜合統一する問題であり、第二に人類學が「文化の一般的法則」の科學として、單に未開種族の問題、その尙古的知識にとどまらず、人間の文化一般に對する廣い

展望の認識であり、従つてわれわれの「現在の現實的問題」に参加しなければならぬといふ謂はばその「應用的」役割として提出される。この二つ(または三つ)の問題は、マリノウスキーにおいて相互關聯的であり、前者は現實問題との對決といふ後者の課題を通して綜合の解決も與へられるといふのである。具體的にいへば第一は、人類學における進化論及び傳播論の問題、心理學的或ひは社會學的方法などに關する學派的抗爭を解決し、それを相補的・相關的なものとして統一することである。それは特に文化の接觸・傳播においてその文化的統一が變化・移行・融合・綜合する「文化變化」の問題として把握されてゐる。しかしかかる接觸による固有文化の普及・融合の過程は、現代文明の中に取り巻かれてゐる凡ての未開社會の現實的問題であり、人類學の實際的要請として提出されてゐる。それのみならず現實の問題は戰爭と戰後再建の問題を廻つて人類學に對して、人種・民族の關係・文化と政治の接觸變化についての一般的解答を要求してゐる。かくして現實的課題が、人類學を文化の科學として展開せしめ、それがまた最初の人類學内部の學派的統一に道を開くものとなるといふ相互關係が成立するわけである。

マリノウスキーにおいて、文化を集約的な統體として考察する機能主義の立場が、彼の未開種族における實地調査を基礎として成立し、その文化的見解もこれを一般的に反省することによつて到達したものであることは既に上述した如くである。その傳播接觸と文化變化の理論もまた同様にマリノウスキーの實證的認識の上に立つてゐることが先づ指摘されなければならぬ。マリノウスキーは「珊瑚礁の菜園とその呪術(一九三五)」において、土人の生活の中にヨーロッパ文化の滲潤の現象を認め、それが固有文化と衝突しその集約的統一を破壊しつつその中に攝取されて新しい結合の構造的統一を形成するといふ文化の傳播變様の過程に注目してゐる。しかし機能主義の立場はかかる文化的變化の現象をそれが現實にはたらいでゐる仕方において把へ、傳播が文化的現實の集約的部分としてはたらく關係を明かにすることを任務とする。従つてそれはこれらの傳播的要素を個別的に抽象し、それ以前の固有文化の過去を

想像的に再構成する如き所謂歴史的方法を意味するものではない。今日世界の凡ゆる種族はヨーロッパ文化の影響の下に變化しつつあり、南海の住民と雖も最早や世界市民の一員である。この大きな變化の中で、先ヨーロッパ的の過去は構成は少くとも現地の問題とはなることができない。傳播の問題はこのやうな意味でマリノウスキーの關心に入り込んで來ると共に、それが文化的幅合の機能的關係の光の下に獨自の姿を照し出してゐることが認められる。しかし文化の接觸變化の問題がマリノウスキーの重要な關心となつたのは、一九三四年の東及び南アメリカの實地調査の結果といふことができる。この地におけるヨーロッパ文化の傳播の事實は、異質文化の接觸變化の現象を反省せしめたのみならず、一般に文化政策、政治的支配の現實の問題、民族と國家の關係などについて鋭い自己批判と人類學的使命に對する反省を導いたであらうことは容易に推測される。マリノウスキーのヒューマニズムの立場がこのやうな現實の未開人との接觸において展開され、人類學をその深い根柢となつてゐるのを知るべきであらう。

文化傳播の理論が進化論的人類學の批判として主張されたことは周知のところである。それが地理的・民族的な關係に注目し、進化主義が時間空間的に抽象的な構成に陥つたことに對して、文化の具體的な様相を明かにするものであることをマリノウスキーも承認する(註一)。しかしかかる文化傳播の現象は單に個々の要素の傳播源泉を探るといふ問題でなく、マリノウスキーにおいては上述の如くそれはどこまでも現實の文化的統體における幅合的機能的關係の問題であつた。そして、かかる文化的變化の中で傳播及び進化・獨立發生の問題は相互に背反的でない相關性として理解することができる。人類學における「學派的抗爭」(註二)は、このやうな立場から綜合され、その成果を共同に統一することができることをマリノウスキーは期待してゐる。

マリノウスキーのかかる見解がアメリカ人類學への接近によることもまた否定できないであらう。アメリカの人類學がボアスの實證的な傳統に従つて、地域的調査・文化圏・境界領域などの方法により、文化の接觸幅合の關係について著しい成果を發展させ獨自の發達を示してゐることは著名である。このやうな流れを汲んで文化類型、文化融合の

現象が今日強い關心の中心を占め、また普通科學としての人類學の役割についての反省も單なる構想の範圍を脱して現實的な構成の段階に入りつつあるといふことができる。このやうな課題と方法に従つて、マリノウスキに對する關心がアメリカの人類學の間に昂つてゐることは當然である。しかし同時にまたそれに對する批判も活潑に行はれてゐる。例へば實證的なアメリカ的傳統から理論的教義化に對する不信は、機能主義の理論化に對する批判となり、またその非傳播的個別主義的立場や非歴史の傾向、偶然的複合様態の無視などについて種々の方面から批判檢討されてゐる。マリノウスキの所謂綜合の課題が、これらアメリカ人類學の批判と問題をも自己自身の立場において理解し、彼獨自の解釋に到達したものであることは疑ひを容れないであらう。元來マリノウスキは新しい理論的問題に對して柔軟な感覺をもつてをり、その點ブレイザーが「單純な精神的精進」に一貫したのと著しい對照をなしてゐる。アメリカ人類學の實證的精密化と理論的綜合への發展がマリノウスキをしてこれに接近せしめた所以であり、また逆にマリノウスキのかかる實際的な柔軟性が廣くアメリカに迎へられ、その理論的指導に重要な役割を演じてゐる理由でもあらう。

上述の如き人類學の理論的綜合の課題は、マリノウスキによれば人類學が現在の現實的諸問題の解決に參與するといふ第二の謂はば實踐的な要請と結びつき、且つこれを通して解決されるものである。それは人類學における一種の應用的人類學と共に、他方現實の包括的な文化理論の領域を構成するであらう。

第二次世界大戰は人類學に幾多の實際的な問題を課したのみならず、現實の根本問題についての解明を要求した(10. 215)。戰爭とは人間の原始的祖先からの運命的な繼承であらうか、集團の紛争解決の不可避的な手段であるか、或ひはまた何等か人間の根源的な生物學的要求に根ざすものであらうか、原始的探求の人類學が解かなければならぬ問題である(10. 216)。國家と民族の問題は人類學的背景において正しい理解が與へられる。文化に對する政治的統

制が文化的統一に如何に作用するであらうか。そこには民族の優越性に關するフアンズムの理論的假構と、政治的暴力による民族文化の支配排壓とに對するマリノウスキ一の激しい學問的抗議の聲を聞くことができるであらう。また民主主義と自由、共產主義と資本主義、自由競争と計畫、などの諸問題についても人類學は無關心であつてはならぬ (P. 217)。これらの領域に關して社會諸科學との相互交渉は人類學そのものの内容を豊かにするものである。更に現代文明の普及は人類學の文化變化の研究に重大な役割を負はせ、また戦後再建の問題についてそれは人種關係について「共通の權利の新しい原理」(P. 218)を基礎づけるものとならねばならない。マリノウスキ一はかかる人種的平等權について、ヨーロッパ文明の傳播と政治的權力の支配とに對する鋭い批判と提言を興へてゐる。人種の關係が平等の權利と義務とを基礎とし、民族的文化の傳統の自發性に對する尊重は、文化の凡ゆる暴力的支配統制を解放しなければならぬことを明かにしてゐる (P. 220 sq.)。

かくの如き主張は、マリノウスキ一の學問的分析から要請される必然的な結論であり、人間の進歩と理性と平等に對するヒューマニズム的要求をその基礎とするものである。その導いて行く結論は健全なる良識の提言であり、所謂専門家の「専門的」偏見ではない。しかしそれ故に實は學問が現實にまで展開しそれと結合する仕方をそこに見出すなければならぬであらう。

今次の戦争において専門學者によつてなされたかくの如き自由な提言と、それを可能ならしめた民主主義の戦線を思ふとき、われわれは再び日本における文化の抑壓と學問の眞理に對する快憤について深く反省しなければならぬ。わが國においても優れた専門學者がゐなかつたわけではない。また凡ての良識が無感覺に眠つてゐたものでもない。それにも拘らず、われわれの知性が帝國主義的權力の前に無力であつたのみならず、専門學者の或るものが、戦争と人民同胞の暴力的支配の手段としてその「知識」を奉仕せしめた過誤について、マリノウスキ一の言葉は教訓を含むものといふことができる。それは、特殊的専門領域が科學の全體的水準に關聯せしめられること、かかる認識體

系が徹底的なヒューマンイズムの要求によつて貫かれてゐること、そしてそれは人民の自由解放の現實的課題に結びつき、それに支持されることによつてのみ可能であること、を教へてゐる。それは今日われわれの學問の要求されてゐる一般的課題に觸れてゐる。科學の諸々の領域を、一つの普遍的眞理に高めるものは、實は普遍的人民の現實的課題に參加することによつてである。このやうにして科學が専門的特殊性を超えた廣い視野を獲得すると共に、専門知識の非現實性を克服して人間の生の豊かな現實性を恢復することができらうであらう。われわれの過去の過誤を再び繰り返さないこと、そのために學問が正しく闘ふことを知ること、それがまたわれわれの學問そのものを著しく發展せしめる道でなければならぬ。

今日科學の機能的な考察は、單に人類學の内部の學派的問題を超えて、廣く社會科學の領域に強い權利を主張してゐるといふのは決して誇張ではない。社會的・文化的關係が高度に機械化されると共に、その有機的關聯が全體の機構を支配してゐるといふ現象は、今日の現實の事實である。このやうな現象に對する科學的考察が、全體の構造の中の要素的諸關聯を機能的に分拆するといふ傾向は、特殊な現象を具體的に把握する上に重要な方法であることは否定できない。このやうにして科學的對象領域が特殊な具體性において限定することができると共に、他方かかる抽象によつて他の諸項の諸關聯を見失ふことなく、全體の機構への還元を可能にするからである。従つてまたかかる函數的關係の理解は、全體の機構の機能的運營を確立、補強するための實用的・實踐的目的に役立つことができる。所謂機構の修正改善は、かかる部分的關係の全體の機能を解明・調整することによつて可能だからである。

しかしながらこのやうな關聯は、全體の機構そのものが與へられたものとして安定してゐると共に、かかる全體の機能の中に諸要素の衝突背反が積分化されて融合統一するといふ條件を前提とするものであらう。かかる全體の安定そのものの根柢が問はれ、その統一的機能が最早や機能としての役割を果さないといふ事體、従つてまたその部分的

背反が全體の中に解消できない矛盾として現はれるといふ事體、については機能的立場は如何に處理しようとするのであろうか。今日科學と現實とに關して基礎危機ともいはれる事體は、このやうな現象を事實としてわれわれの前に提出してゐるのではないであらうか。機能主義の立場はかかる事實を事實として認めないのであるか。或ひはそれを如何に解決しようとするのであろうか。機能主義が、要素的個別的機能的關係を力學的な全體の相關において具體化し、文化的・社會的關係の現實においてはたらいひてゐる様相を理解する上に重要な役割を演じたことは承認されなければならぬ。そして、このやうな構想が部分の機能的疾患を摘出し、全體との調和的關係において處理する方法としての謂はば療法的な機能についても評價を失してはならない。しかしこのやうな機能的背反が如何なる意味を擔ふかについて、それが正しい洞察に導くことができるであらうか。かかる力學的關係が、謂はば一つの平面的見取圖の中の相互關係として理解され、その圖形の全體の調和の平面において處理される場合、かかる圖形そのものの歪みと轉換といふ力學的關係をその中に見出し、或ひはそれを解決することができるとであらうか。換言すればかかる機能の變化を同時に構造の發展の中に位置づけ、その發展においてこれを解決するといふ處理を指示し得るとであらうか。われわれが機能主義の意味とその重要性を承認するとき、それ故にまたそこに様々の學問的問題と疑問が生れて來ることを承認しなければならぬ。

マリノウスキイについてもこれらの問題は、同時にその人類學的機能主義に關して問はれなければならないであらう。そして、それがまたマリノウスキイの學問的業績を發展せしめる道である。しかしこれらの展開は、マリノウスキイの紹介を目的としたこの小論の範圍を超えてをり、また簡單に取扱へる事柄でもない。われわれはただ最後に、マリノウスキイがこの論文で示してゐる人類學及び一般に科學の機能的綜合の基礎としての人間の地平の要請と、世界の民族と人民の自由と平和とに對するヒューマニズムの善意とを再び回想するにとどめたい。戦後の今日これらの問題は如何に展開されてゐるであらうか。それはわれわれにとつて解決されて興へられてゐるであらうか。今日尙ほ

殘されてゐる人民の不安と社會の危機の現實は如何に對處さるべきであらうか。機能主義の立場がそれを如何にして解決し得るであらうか。またそれを解決する方向が機能主義の中に果して見出せるであらうか。マリノウスキの普遍的人間性の立場はかかる現實と科學の統一の課題に對して如何に發展せしめらるべきであらうか。これらの問題ともあれ、人民の自由と平和に對する普遍的な要求とその實踐的課題の中にその解決が見出されなければならぬといふマリノウスキの言葉は、われわれの課題を導いて行く上に示唆となることは否定できないであらう。

フレイザーとマリノウスキの二人の學者の逝去は、これらの諸課題をわれわれの世代に残してゐる。それは繰り返へして述べる如く獨り人類學の問題にとどまらず、われわれの社會と文化の學問の共通な問題であり、自由と平和を愛する諸國民の課題である。この二人の學者としての偉大さは實にその學問がこのやうな大きな問題において提出されてゐる偉大さである。従つてその學問を理解し記念することは、このやうな偉大なる課題への共同の参加によつてのみ可能となるものであらう。

——一九四八・九・四——

註一 マリノウスキは從來進化論、傳播論などの凡ゆる歴史的再構成の立場を鋭く排撃すると共に、その比較人類學の方法をも否定する態度を採つてをり、それに對して機能主義はデュルケムなどと共に謂はは某種の調査方法を主張してゐる。然るに今ここで (D. H. C.) マリノウスキが比較方法をこのやうな條件の下で承認してゐることは、後に傳播の問題で解れるところと共に——數行にも足らぬ言及ではあるが——充分注目し得る箇所であらう。

二 これらの問題は夫々獨立の主題として取扱はるべく、この紹介の範圍を超えるものである。これに對應するマリノウスキ自身の見解は、二氏の遺著 *The Dynamics of Culture Change, An Inquiry into Race Relation in African*, ed. by Phyllis M. Kabury, 1947. 及びマリノウスキ夫人の序文のついた *Freedom and Civilization*, 1941. に於て展開される。それがマリノウスキの主要なる關心の問題であつたことがこれによつても知られるであらう。前者については松浦健一氏の明確で有益な紹介とマリノウスキの略傳がある（『民族學研究』第十二卷第四號、昭和二十三年三月）。尚ほフレ

イザードについては横一雄氏によるオウニイ族、ブレイザードの画像 R. Angus Downie; James George Frazer, 'The Portrait of a Scholar, 1919. の條に紹介があるのを附記しておく(東洋學報第三十一卷第三號、昭和廿二年十二月)。オウニイはブレイザードの助手として、ブントロキア、の編者である。この評語からはしかしブレイザードの死については何物も知り得なかつた。——マリノウスキの交むる一般の問題に關する研究は、上述の著書の他に集團と個人の機能的關係を取扱つた論文 The Group and the Individual, an Functional Analysis, (*In* American Journal of Sociology, vol. 44, 1939) が参照されるべきである。

三 Coral Gardens and their Magic, A Study of the Methods of Tilling the Soil and of Agricultural Rites in the Trochmal Islands, 2 vols, 1935, Vol. I, p. 480 sq.

四 かかる立場を實證的研究に再現したものに、日・エッケルマン「未開社會に於ける文明の實驗」(一九三九(邦語學用宗傳))は優れた分析と思はれる。

五 例へば R. H. Lowie: The History of Ethnological Theory, 1937, p. 235 sqq.; A. Goldenweiser: Leading Contributions of Anthropology to Social Theory (*In* Contemporary Social Theory, ed. by H. E. Barnes, etc., 1940, p. 472 sqq.)

六 マリノウスキは一九三九年以來イェール大學の訪問教授を兼ねてゐた。

七 機能的な方法を單に未開社會にとどまらず、現代文化社會に適用する應用的研究は、例へば W. Lloyd Warner & Paul S. Lunt: The Social Life of a Modern Community, 1941. に於けるオズボーン・マシンの調査があり、また中國村落生活に關する Hsiao-Frang Fei (費孝通): Peasant Life in China, A Field Study of Country Life in the Yangtze Valley, with a Preface by Professor B. Malinowski, 1939. (邦語版)がある。

八 戦争の人類學的分析に關するは、cf. An Anthropological Analysis of War, (*In* American Journal of Sociology, vol. 46, No. 4, 1941)